

お薬のしおり

世界糖尿病デーと糖尿病の新しいお薬

No.141 (H25.11)

東京医科大学病院 薬剤部

みなさんは11月14日が世界糖尿病デーであることはご存じですか？
現在、糖尿病有病者数は2013年現在で3億8,200万人（有病率8.3%）であり、日本の現在の成人糖尿病人口は720万人で、昨年の710万人から少し増加傾向となっています。また、世界ランキングでは中国、インド、米国をはじめとし、日本は10位となっています。今回は、世界糖尿病デーと糖尿病の新しいお薬（インクレチン製剤）についてご紹介します。

□世界糖尿病デーとは・・・？：世界糖尿病デーは、糖尿病の脅威が世界的に拡大しているのを受け、世界規模で糖尿病に対する注意を喚起しようと、IDF（国際糖尿病連合：現在約150カ国が加盟）と世界保健機関（WHO）によって1991年に開始され、2007年には国際連合（国連）の公式の日になりました。今年の世界糖尿病デーのテーマは「糖尿病教育と予防」で、2009年から5年間続けられた共通テーマとなっています。

□世界糖尿病デーでは何をするのか・・・？：11月14日を中心に、世界糖尿病デーに賛同する世界の200以上の国や地域で、市民向けの講演や糖尿病教室、無料の糖尿病の検査が開催され、糖尿病の早期発見と治療の継続の大切さが呼びかけられています。また、世界の80を超える国の1,000カ所以上で、有名な建造物が世界糖尿病デーのシンボルカラーであるブルーにライトアップされます。IDFでは、”Unite for Diabetes”（糖尿病との闘いのため団結せよ）というキャッチフレーズと、国連や空を表す「ブルー」と、団結を表す「輪」を使用したシンボルマークを採用し、「ブルーサークル」の認知を高める運動を行っています。日本でも、日本糖尿病学会と日本糖尿病協会が中心となり、全国各地で関連イベントや、東京タワーや大阪城などのブルーライトアップが開催されました。



world diabetes day

□糖尿病の新しい治療薬には何があるのか・・・？：

糖尿病の治療は、食事療法と運動療法を基本とし、この2つで良好な血糖コントロールが実現できないときに、合併症の発症や進行を抑えるために、

薬物療法を開始します。薬物療法としては、内服薬と注射薬の2つがあり、内服薬の効果は大きく分けて以下の3つのタイプ、①インスリンの働きを良くする、②インスリンを分泌させる、③糖の消化・吸収を遅らせるが挙げられます。また、インスリン製剤は、不足しているインスリンを注射で補うことで健康な人のインスリンの出かたに近づけ血糖をコントロールします。近年になり、従来の糖尿病治療薬とは大きく異なる働きで血糖降下作用をもたらす「インクレチン製剤」の注目が高まっています。

□インクレチン製剤とはどのような薬なのか・・・？：

インクレチンとは、食事をした時に小腸から血液中に分泌される消化管ホルモンの一種です。小腸から分泌されたインクレチンは膵臓へ行き、膵臓のβ細胞からのインスリン分泌を増加させたり、膵臓のα細胞からのグルカゴン（血糖を上昇させるホルモン）分泌を抑制したりします。これらの働きは血糖値が高いときのみで、正常値にコントロールされているときには働きません。このインクレチンには、GLP-1とGIPの2種があり、体内で分泌後、DPP-4（ジペプチジルペプチダーゼ-4）という酵素により速やかに分解され、その活性を失ってしまいます。これらの働きに着目した経口薬（DPP-4阻害薬）と注射薬（GLP-1受容体作動薬）の2種類があります。

□DPP-4阻害薬：インクレチンを分解する酵素（DPP-4）の働きを阻害し、インクレチンの濃度を上昇させることで、インスリン分泌が増強され、血糖値を下げる働きがあります。当院採用薬では、ジャヌビア、グラクティブ、エクタ、トラゼンタ、ネシーナ、スイニー、オングリザが該当します。1日1～2回の服用で、食事の影響がないので食前・食後のどちらの投与でも良いことや、血糖コントロールの改善に伴う体重の増加のリスクが低いことなどが利点として挙げられています。

□GLP-1受容体作動薬：DPP-4による分解を受けにくくしたGLP-1に構造の似た薬剤で、長時間にわたってGLP-1の働きが維持されます。当院採用薬では、ピクトーザ、バイエッタ、ビデュリオン、リクスミアが該当します。これらは薬剤によって投与回数や量が異なります。最もよくみられる副作用は、便秘、下痢、胃の不快感などで使い始めの頃によく現れ、数日から数週間でなくなるのがほとんどです。

お薬のことや糖尿病のことでご不明な点やお困りの点がある場合には、医師または薬剤師へご相談ください。

